

経典埋納の呪術的作法

—堂ヶ谷経塚の構造と副納品—

井鍋 誉之

要旨 静岡県牧之原市堂ヶ谷遺跡では3基の経塚が検出され、1号経塚から太刀、短刀、鏡などの副納品が出土した。本稿では堂ヶ谷経塚を中心に副納品の配置や出土状態から埋納作法や主要な副納品の意義について考察する。副納品の配置には規則的な配置を示すもの、不規則な配置を示すものが認められる。前者は経典護持そのものを視覚的に示し、後者は経典埋納前の状態であることから呪術的な儀礼を通じて埋納されたものと考えた。曲げられた太刀は外見上、黒漆太刀であるが、構造内部に細工を施したなまくら刀の可能性が高い。これは太刀を曲げる行為に意味をもたせ、呪術的な儀礼により辟邪の力を備えた刀として経塚に納められたと考えられる。鏡、合子は意図的に破碎されていることに着目した。16面の鏡のうち、1面は破碎されており、鏡本来の機能を失うとともに辟邪の鏡にも何らかの役割を担っていると考えた。さらに、合子の破碎例やいわき市上ノ原経塚の短刀の破碎例から経典埋納前、あるいは埋納後の清浄儀礼が行われたとする。そして、経塚造営の整地段階で50点以上の鉄釘が出土したことから経典埋納前に儀礼を執り行うための幄舎の存在を指摘した。

キーワード：多量副納、太刀、短刀、鏡、合子、鉄釘、辟邪、曲げる、割る、幄舎、呪術的作法

1 はじめに

古代から中世へと動いていく中で、飢饉、疫病などが頻発し、常に人々の間で社会的な不安が積みまっていた。そのため、当時の日本には浄土思想が広まり、造寺、造仏、写経といった作善業を通じて、人々の間で欣求浄土、厭離穢土を求めるようになっていく。この時期に各地で盛んに造られた経塚もまた同様の性格を有していたといえよう。

経塚は経典を書き写して、供養し、地下に埋納した如法経の信仰形態である。その際には経典を供養する遺物、あるいは辟邪の遺物などが経典の周りに納められている。

今回、静岡県牧之原市堂ヶ谷遺跡では経塚は3基確認された。中でも1号経塚からは短刀63点、鏡16点、折り曲げられた太刀1点などが出土するとともに、経塚の造営方法や副納品を納める手順、配置等が明らかにされた。今回は堂ヶ谷経塚を中心に副納品の配置や出土状態を通じて、埋納作法や主要な副納品の意義について考察していく。

2 埋経作法

埋経作法については『如法経現修作法』『如法経手記』『如法経雜記』『如法経濫觴類聚記』といった行儀書がある。

石田氏をはじめ如法経と埋経が密接な関係があることを指摘し、作法の手順については兜木氏により『如法経現修作法』から埋経作善の研究が進められ、以下のように明らかにされた（兜木1984）。

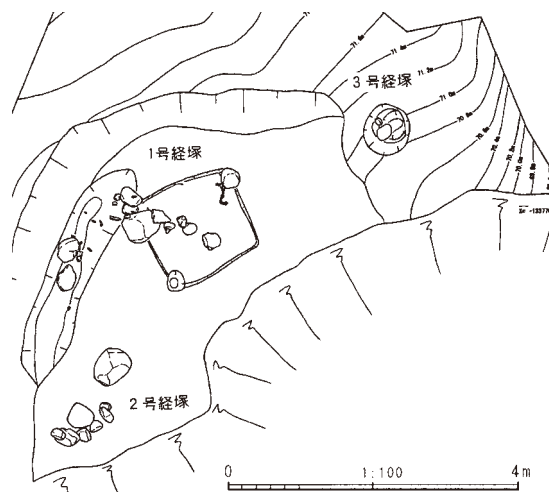


図1 堂ヶ谷経塚の造営地

前方便事 七日間、精進潔斎し、毎日、三時に懺法
を行う。その後、行水して身を清め、堂
内を荘厳する。

正懺悔 二一日間、毎日、六時に法華懺法を行う。
料紙迎え 正懺悔七日後に行う。石墨草筆を用意す
る。

水迎え 正懺悔一四日後に行う。料紙は浄水で清
め、丁字、覆面を用意し、草座を設ける。

筆立(写経) 三七日から如法經の書写に取りかかる
ために如法筆立作法があり、写経の間に
懺法を行い、香華を供える。

十種供養 花、香、瓔珞、抹香、塗香、焼香、幡蓋、衣
服、伎楽、合掌の十種の供養具を用いる。

奉 納 陶器製の容器に納めて埋納する。

このほか、埋経の作法については多くの研究がすす
められてきており、なかでも山川氏は埋経の作法を十
項目に分け、それぞれに使用される用具をまとめている。
そこで仏具を主体としながらも、日用品も含まれて
いることを指摘する(山川1999)。

実際に埋経が行われた痕跡である経塚は如法經奉納
次第の様子でのみ確認されるに過ぎないものの、調査
成果と文献史料から経塚構築過程を復元した研究とし
て三宅氏、稲垣氏の研究が挙げられる(三宅1967、稲
垣1977)。

埋納方法の手順を示すと以下の通りである。

- | | |
|-------------|----------------|
| ①行列を組む | ②石壇所に到着 |
| ③穴に散花・散香・灑水 | ④外容器の設置 |
| ⑤再び散花・灑水 | ⑥経筒を土筒に入れ蓋をする。 |
| ⑦穴に蓋石をする | ⑧石壇を築く |
| ⑨石塔を安置 | ⑩正面で合殺 |
| ⑪行道、後唄、伽陀 | ⑫退出 |

このように多くの研究者が指摘するとおり、経塚と
文献史料を比較した場合、副納品の記述がない。考古
学的調査において、玉や花瓶などの仏具が納められる
例は少なからずあり、作法と関連する例も見受けられ

るが、一般的には短刀、鏡、青白磁合子などが多く認
められる状況である。

3 堂ヶ谷経塚の埋納方法

今回、検出された堂ヶ谷経塚は寺院と近接しており、
裏手に当たる。場所の選定には寺院より1段高い場所
を選び、斜面を削り、平坦地を造成していた。また、
斜面と平坦地の境に排水溝を設けており、計画的に少
なくとも3基の経塚を造成する意図が明瞭であった。

発掘調査で検出された堂ヶ谷経塚に関して、次のよ
うに経塚の構築をまとめた。

1号経塚

- 1 方形土坑の掘削……………釘・鏃状製品の出土
- 2 木炭層の被覆……………太刀・短刀・鏡、弓矢の
出土
上層……………白磁合子の破碎
- 3 外容器と經典埋納……経筒の周りに石を積み上
げている。この間、副納
品はなし。
- 4 石の積み上げ……………方形の石積み区画を盛り
上げる。

2号経塚

遺存状況は良好ではないが、扁平な底石の下から短
刀16振り、弓矢、毛抜きが出土した。木炭層はなく、
外容器が置かれた底石の下から短刀、弓矢が出土して
いることから1号経塚との共通性が認められる。とく
に経筒の埋納位置が地下式ではなく、地上式であるこ
とが注意される。

3号経塚

- 1 埋納穴の掘削……………2点分の穴を掘削し、底
石を設置する。
- 2 2点の外容器の埋納…外容器を覆うように石を
積み上げる。
外容器蓋の高さ…合子の副納
- 3 石の積み上げ……………方形の石積み区画を盛り
上げる。
短刀、鏡の副納

1、2号経塚は経塚の構造、埋納位置、短刀の量か
ら極めて類似している。3号経塚は地下に経筒を納め、
副納品は少なくとも経筒よりも上位に納められている。
鏡1点、短刀2点、青白磁合子1点が出土しており、
1、2号経塚と比して副納品の量は少ない。

出土品からは時期差を示していないことから経塚の
構造、副納品の差異は、願主、壇越など経塚营造の主

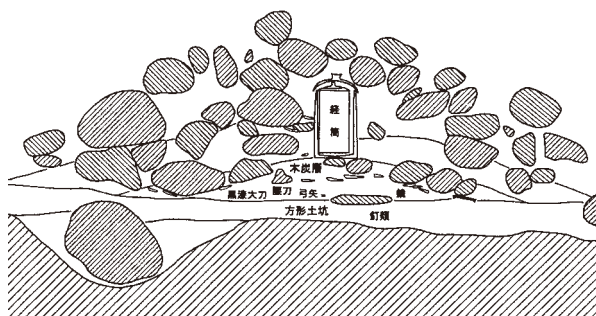


図2 堂ヶ谷1号経塚模式図

体者の違い、経塚营造の目的が異なるのか、あるいは宗派や流派による違いなのか不明である。

規則的な配置と不規則な配置

広島県宮地川経塚は古墳天井石の上に小石室を組み、経筒を埋納している。小石室外には円形に短刀16点を並べている。刃を外方に向け、折り曲げられた太刀も配される。その内側には鏡16点が鏡背面を上にして並べている様が配置復元図として報告されている。

経筒（経典）を中心に結界をはり、規則的に配置されている様子から明らかに経典そのものを護持する意図が読み取れる。また、宮地川経塚に近接する野田山経塚も同様に土坑内に刃を外方に向け、並べている。さらに小石室内にも短刀2本がハ字に経筒の周りに配されていることから、辟邪の用具として用いられていたことがわかる。埋置法が類似することから共通する儀礼を執り行った可能性がある。

一方、堂ヶ谷経塚では経筒下の木炭層内に多くの短刀、鏡が折り重なるように出土した。平面的には1点1点が規則的な配置を示す状況にはないものの、全体

の形状としては方形を意識しながら重ねている状況であった。このほか、刀と鏡の位置関係や刀の切先方向、刃部の向きなど視覚的な法則性、規則性を伺い知ることとはできなかった。むしろ、短刀、鏡の量的なものを誇示する印象を受けた。

足立氏は1号経塚の場合、刀と鏡の副納が経典埋納前であることから、埋納土坑あるいは造営地全体への供養とした。そして、修正会にかかわる田遊びの「剣の舞」の演目に着目し、大地、中空、天空を刀で突き、複数回にわたり、除魔する所作から堂ヶ谷経塚においても複数回の除魔儀礼を執り行った結果とみる。

また、3号経塚では外容器埋納後に短刀を副納しており、埋納作法そのものの終了儀礼とみている（足立2010）。

このように従来、刀の出土は辟邪の用具としてひとくくりに語られてきたが、経筒との位置関係、配置状態、量的出土等から経典そのものの守護を示すもの、埋納前の除魔儀礼、埋納後の終了儀礼などの儀礼を示す可能性がある。

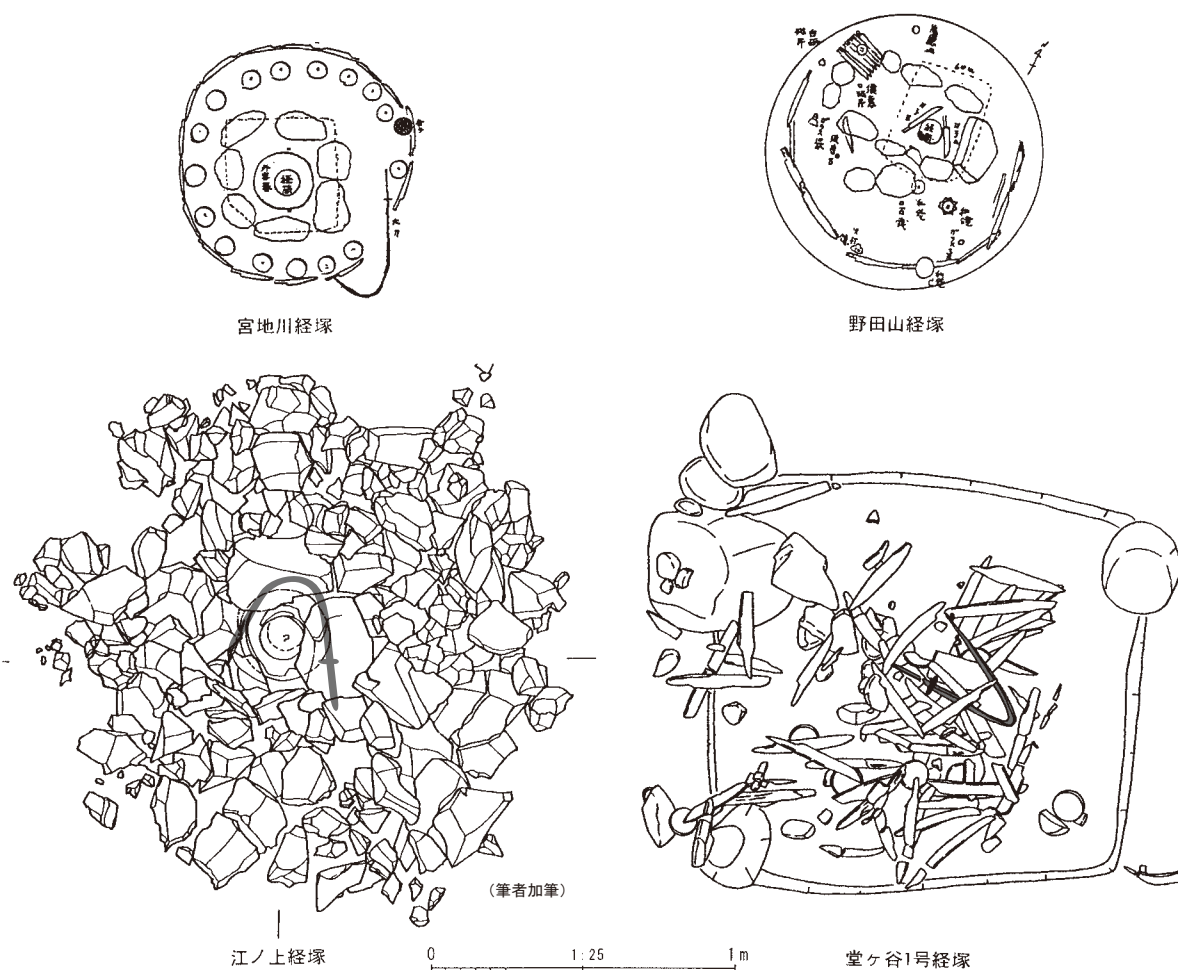


図3 副納品の配置

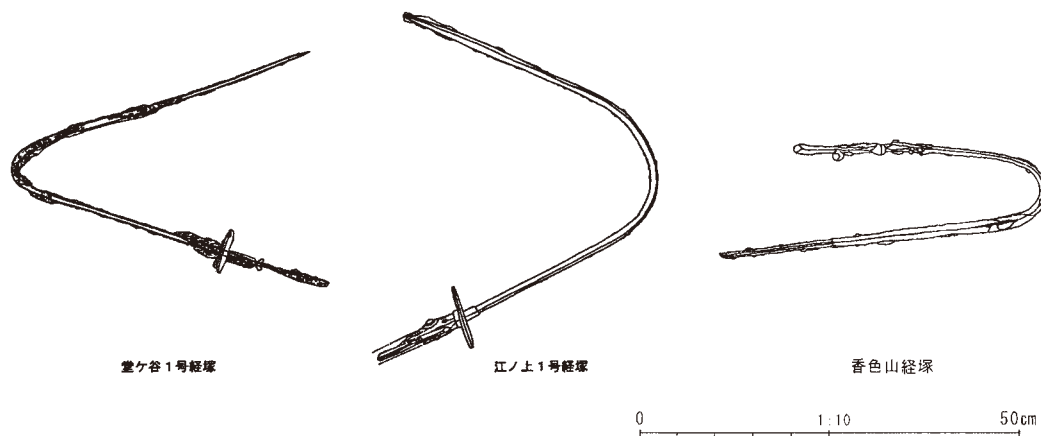


図4 曲げられた太刀の諸例

4 折り曲げられた太刀・短刀

折り曲げられた太刀の出土例は堂ヶ谷1号経塚を含めて6例ある。兵庫県江ノ上1号経塚、岡山県小山経塚、広島県宮地川経塚、香川県香色山1号経塚、静岡県森町小国神社経塚があり、従来、瀬戸内沿岸を中心とされていたが、堂ヶ谷例により東海地方、ひいては東日本を含めて今後出土する可能性がある。

江ノ上経塚 兵庫県加西市に所在し、4基の経塚が確認されている。最も規模の大きい1号経塚は地下式構造で、石郭内に外容器として甕が用いられていた。副納品は曲げられた太刀1点、短刀2点、合子2点、銭貨1点である。

曲げられた太刀は甕を取り囲むように配置され、刃を上に向けていた。鞘金具は遊離していることから鞘は抜かれて埋納された可能性が高い。鞘金具の表面一部に茶褐色の膜が遺存していることから黒漆太刀の可能性が高い。

このとき太刀とともに、短刀B、青白磁合子1点も納められている。その後、銭貨1点を置き、外容器の甕の上部が隠れる段階で短刀Aが納められたようである。つまり、副納品を納めるには①外容器を納める前段階、②外容器を納めた段階、③外容器が覆われる段階の3段階に分けることが可能であろう。

堂ヶ谷1号経塚と比してみると、経典埋納前であること、刃を上向きにしていること、刀の中位で曲げられていることが共通している。一方、相違点は埋納位置、鞘の有無である。江ノ上1号経塚の場合はあかも外容器の周りに置かれ、あらかじめ、経典を守護するために副納されたことを意味していると考えられる。他方、堂ヶ谷経塚は経筒より下の位置で、中心である経筒より北東寄り出土しており、江ノ上1号経塚の

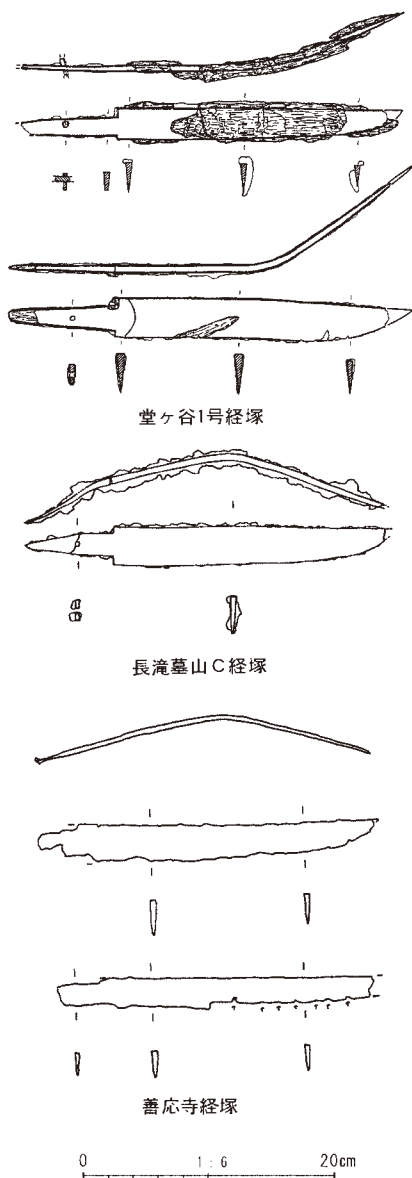


図5 曲げられた短刀の諸例

出土状況は異なる。また、鞘については堂ヶ谷1号経塚では鞘ごとと曲げられている。

香色山経塚 香川県善通寺市に所在する。1号経塚は上下2段に埋納することができる二階建構造の経塚である。縦長の石材を用い、長方形の石郭を構築している。中段で縦長石材を並べ、蓋としている。経筒は下部の郭に設置され、仕切り石で区画される。経筒を納める主郭と副納品を入れる副郭からなる構造である。

折り曲げられた太刀は外容器の上部とほぼ同じレベルで出土しており、経筒設置後に納められたと考えられる。刃部は上に向け、太刀は折り曲げられた部分で折損している。鏝をはじめ刀装具類は出土していない。太刀の下からは短刀5本が紐で束ねられた状態で出土しているとされる。

このように折り曲げられた太刀の出土状況をみていくと、鞘ごとと曲げられた状態、鞘を抜いて曲げられた状態、刀装具を伴わない状態など、出土状況は一様ではない。出土位置についても経典埋納前に納めていること、経典埋納時に経典を守護するために意図的な配置を施すものが指摘できる。いずれにしても、完成された日本刀に力を加えると折れるのが普通で、曲がるということは考えにくく、材質構造的に柔軟性をもつなまくら刀とみるべきであろう。

注意されるのは堂ヶ谷1号経塚、香色山1号経塚出土の太刀はともに折損している。とくに堂ヶ谷1号経塚の太刀では折損部分のそれぞれの断面に銅が付着しており、これを銅鑢によるものと考えている（村上2010）。また、鏝は木芯で、鉄板2枚で覆う構造で、切羽も含めてきわめて特異な構造である。つまり、外見上は黒漆太刀であるが、構造上は実用武器としての太刀とは言い難い。そして、なまくら刀とはいえ、実際は折れている刀であった。しかし、太刀を曲げる行為に意味を持たせ、呪術的な儀式的効果を最大限高めるための装置としてこの曲がり太刀はむしろ精巧に作られているといえよう。

なぜ太刀が曲げられたかについて、足立氏は曲がることを大衆の前で演劇的に示すことで験を表し、呪力を備えた刀とした。それは修験者による秘法と称しなされたものと推定している（足立2010）。

曲げられた短刀 曲げられた太刀の出土例は全国的にみても数は少なく、一般的に経塚からは短刀の出土が多く認められる。短刀は柄縁が半円形に突出し、鞘口も半円形に合う呑口構造の合口拵えである。平造りで反りのあるものないものなどがあるが、経塚から出

土する短刀の大半はこの呑口構造の合口拵えと考えられる。

なかでも堂ヶ谷経塚では意図的に曲げられたと考えられる短刀が少なくとも13点確認できる。この中には茎部が曲げられたものや刃部全体が緩やかに湾曲するものがあり、一概にすべてが意図的に曲げられたとは考えにくい。短刀は折り重なった状態で出土しており、土圧による影響や刀そのものの構造的な問題を抱えている場合も想定される。しかしながら、太刀と同様に刃部の中位で折り曲げられ、なおかつ、鞘入りのものが6点ほど存在する。これらは堂ヶ谷の太刀と同様に鞘入りで曲げられた可能性が高い。

こういった曲げられた短刀の出土例は石川県長滝墓

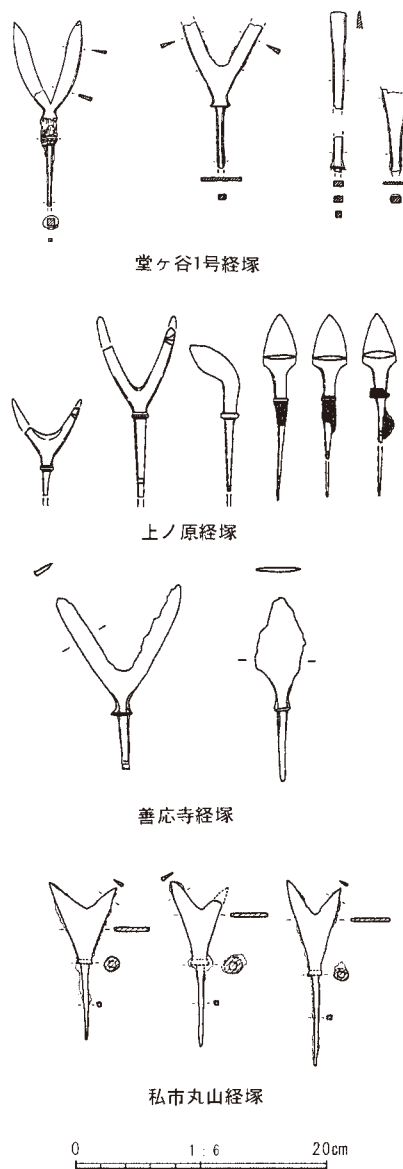


図6 雁股鍔との組み合わせ

山C経塚において確認できる。刃部の中位で曲げられた部分は外容器の壺体部の曲面に合わせており、先の江ノ上1号経塚の曲げられた太刀と同様の副納状態で経典守護の意図を読み取ることができる。

山梨県善応寺経塚の短刀は中位で折り曲げられている刀や刃を潰している短刀もあり、短刀としての機能を喪失している。そして、折り曲げられた短刀2点で1組となし、儀礼の一環として短刀の破壊が行われたとする(時枝2011)。

5 1組としての鉄鏃

堂ヶ谷1号経塚では4点の鉄鏃が出土している。雁股鏃と方頭鏃で構成される。雁股鏃と方頭鏃は刀と鏡の集積部分よりやや外側の位置から出土しており、横置きの状態であった。出土位置から2点で1組の可能性が高く、明らかにこの鉄鏃群は経典埋納前である。

音響を発する鏑矢の大半が雁股鏃であり、儀礼用として使われることから、足立氏は墓目作法との関連に着目した。小笠原弓馬術礼法では誕生の祝いや魔性退散の意味で礼式の最初に放たれるとされ、鳴鏑神事により邪気を払うものとされる(足立2010)。

福島県いわき市上ノ原経塚においても雁股鏃と平根の柳葉鏃との組み合わせが少なくとも2組確認できる。この鉄鏃群は埋納施設5回目で経筒の埋納前で、雁股鏃は鏃身を上にして突き刺した状態で出土しており、儀礼に際し、供えられたとされる(猪狩1998)。

雁股鏃と平根の柳葉鏃の組み合わせは先の善応寺経塚においても確認でき、時枝氏は経塚造営地を結界し、浄化する作法とし、矢を射る作法が行われたとする。さらに2種類の鏃身形態を用いることから陰陽などを考慮した儀礼が執行されたとされる(時枝2011)。このほか、京都市私円山経塚では横口式構造の経塚で、石室内から雁股鏃が3点出土している。出土状態から少なくとも1点の雁股鏃は経典埋納前の段階に納められている(鍋田1988)。

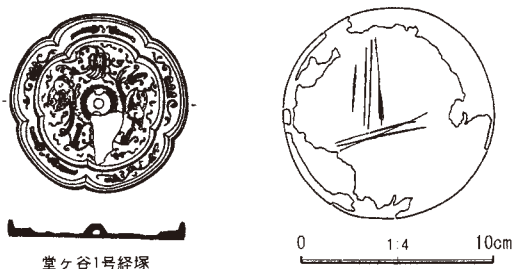


図7 破砕鏡と傷が付けられた鏡

6 破碎される副納品

鏡 堂ヶ谷1号経塚からは16面に及ぶ鏡が出土した。宋鏡2点、方鏡1点、五花鏡1点、円鏡11点、不明1点で構成される。16面の鏡は木炭層が被覆された段階で納められており、経典埋納前である。いずれの鏡も漆器の鏡筒に入れられた痕跡はなく、また、繊維痕や紙包みは確認できないため、化粧道具として鏡が納められた可能性は低い。埋納位置は経筒を中心に北側と南側に概ね1列ずつ配され、刀と重ねられた状態であった。鏡面と鏡背面の上下関係に着目したが、鏡式による差異や配置状況に特徴を見出すことはなかった。

しかし、瑞花双鳳五花鏡は注目することができる。今回出土した鏡のうち、光沢があり、質的に良好であるにも関わらず、意図的に破碎されていた。破片は3箇所から出土しており、紐付近は欠失していた。このほか、洲浜萩薄双鳥鏡の鏡面には刃物のようなものを用い、傷を付けている。

このように鏡を意図的に破碎する行為や鏡面に傷を付ける行為から鏡本来のもつ機能を失っており、他の鏡と明らかに違う意味合いを持たせていたであろう。

経塚における鏡の用途は多様であり、村木氏により以下のように整理されている(村木2003)。経筒に用いられた鏡、化粧道具としての鏡、鏡像として納められている例があり、それぞれ、経典守護、供養品、御正体として納められていることを指摘している。とくに化粧道具としての鏡には毛抜き、櫛、簪、合子、鋏が共伴し、鏡には漆器の鏡筒や和紙に包まれていることが多いとされる。

合子 堂ヶ谷1号経塚の貿易陶磁は白磁埴形合子1点、白磁碗3点が出土している。いずれも木炭層が被覆された後に石を敷く段階で出土しており、経筒を設置する直前である。いずれも完形品ではなく、とくに白磁埴形合子は細かく破碎された状態であったが、埴形合子は概ね完形品に復原することができた。瑞花双鳳五花鏡と同様に意図的に破碎されている可能性がある。

7 鉄釘と鋸状製品

このほか堂ヶ谷1号経塚では鋸状製品が2点出土している。1点はU字状を呈するものの、屈曲部は緩やかで鋸としての機能を果たしているとは言い難い。出土状況は木炭層に覆われる段階で、経筒位置より離れた場から出土した。

もう1点は方形土坑を掘削した後に納められている。U字をなす片側部分が反対方向に曲げられた状況であっ

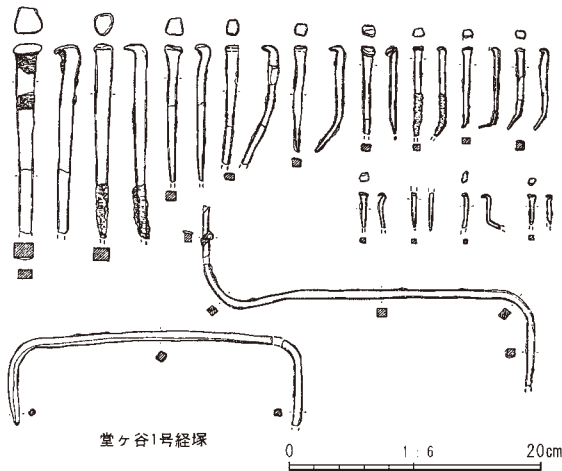


図8 釘と鋸状製品

た。用途については不明であるが、人為的に曲げられており、太刀と同様に曲げる行為に意味を持たせたのであろう。

堂ヶ谷1号経塚から鉄釘は少なくとも50点以上出土した。3号経塚からもわずかに出土しているが、1号経塚の場合は経塚を造営する初期の段階に鉄釘の分布がみられた。分布は大きく排水溝付近と経筒位置周辺に分けられる。

排水溝は平坦地と法面の境に沿って築かれており、斜面から流れ出てくる水への対処として地形を利用して構築している。鉄釘は排水溝の覆土から出土していることからある一定期間は図1のような状況であったと推測される。

鉄釘の大きさは5寸から1寸程度の大きさのものがあるが、1寸、2寸の鉄釘が多い。鉄釘が束の状態では出土していないことから釘箱を納めたとは考えにくい。頭部の形状は頭巻釘と一般的なもので、寺院から出土している鉄釘と何ら変わりがない。1寸から5寸の釘がみられること、木質が遺存していること、排水施設を整備していることから経典埋納前に幄舎のような仮設の建物を建て埋納儀礼が執り行われていたと想定したい。

この点に関して足立氏は『門葉記』『如法経』から神名帳を法華経護持のために竹釘を用いて長押に打ち付ける例を参考に三十番神を記載した神名帳に釘につけたまま納めた可能性が高いとしている。

鉄釘が出土した例は少ないが、兵庫県上板井経塚からは12点の釘が確認され、頭部形状のわかるものは6点ある。折釘で、大半が石室内部の出土である。石室内部は経筒外容器を納めるのみの容積であることから経筒外容器をさらに覆う木櫃状のものと考えておきたい。

8 結 語

曲げる行為 堂ヶ谷1号経塚では太刀、短刀に規則的な配置はみられなかった。一方で宮地川経塚例や江ノ上経塚例は短刀を円形に並べ、規則正しく副納する様相や、経筒の周りに折り曲げられた太刀がみられる様はまさに将来にわたり経典を護るための埋置法であり、経典保持そのものを重視したものとみることができよう。

堂ヶ谷1号経塚の太刀、短刀は経典埋納前に埋置されており、除魔を含む呪術的な儀礼を通じて、そこに埋納されたとみるべきであろう。いずれにしても太刀、短刀の利器は経巻を護るために邪を払う辟邪の力をもつ用具であり、埋置法の違いは宗派や流派による呪術的作法の違いであろう。

破碎する行為 破碎された鏡は瑞花双鳳五花鏡の1点である。堂ヶ谷1号経塚の中では質的に良好であるにもかかわらず、破碎され、一部の破片は欠失していた。鏡の用途は多様であるが、古墳に副葬された鏡に邪を払う神秘的な力をもつように平安時代にいたっても鏡の呪術的な力をもつと期待されてきた。経塚に納められた鏡の中で破碎行為や鏡面に傷を付ける行為が認められるものは寡聞にして知りえないが、16点のうち2点は鏡本来がもつ機能が失われていた。鏡の中にも儀礼の場面で、何らかの用途を担っていたことを示すであろう。

合子は経筒埋納の直前で破片が集中的に出土した。これより上層は刀の副納はなく、容器類の副納のみに変換する。

上ノ原経塚例では経典埋納後に蓋石を被せる直前に短刀の破片が散在し、鍔身が曲げられた状態の鉄鍔もあることから儀式が行われたとしている（猪狩1998）。これらを参考にすれば、堂ヶ谷例においても副納品の様相が変わる段階に破碎されていることから埴形合子の意図的な破碎行為は経典埋納前の儀礼終了を示す清浄儀礼の一環と考えたい。

以上、堂ヶ谷1号経塚から出土した副納品を中心に雑駁な分析ではあるが、太刀、短刀、鏡、合子に着目し、埋納された意味について考えてきた。

辟邪の用具として使われる太刀、短刀、鏡の埋納位置や出土状態、出土数から規則的な配置や不規則な配置があり、これらは経典そのものを守護するためのもの、埋納前の除魔を含む儀礼、埋納後の終了儀礼など経塚造営から経典埋納までに至るさまざまな儀礼の痕跡を示すものであろう。

刀には曲げられるもの、破碎されるもの、刃部を潰すものがあることをみてきた。足立氏や時枝氏が指摘しているとおり、曲げる行為は宗教者の験力をより誇示するものであろう。そして儀礼の中で曲げる場面をみせることにより、辟邪の力を備えた刀として経典護持のために納められたと考えられる。しかし、実際は刀の外見は変えずに、なまくら刀として構造的に細工が施された刀を用いていた。

今後、こういった刀の類例は増加すると考えられる。いずれも呪的な儀礼を通じて行われたと推測され、新たな埋納作法を提示するものである。

鏡は刀以上に多様性を持ち合わせており、出土状況をつぶさに検討することにより、村木氏がみているように日用品としての鏡、辟邪の鏡を区別することが可能であろう。また、辟邪の鏡の中にも破碎された鏡、鏡面に傷が付いたものがあり、よりいっそう経塚造営儀礼との関連のなかで意味付けていく必要がある。

鉄釘の出土は経塚造営の整地段階で、50点以上単独で出土していることから造営に伴う建物の存在を想定した。建物の大きさや構造は不明であるが、祭礼を行うために建てられた幄舎のような性格を有していたであろう。そして曲げられた太刀、短刀や破碎された鏡の存在から、除魔を含めた呪的な儀式がその場で執り行われたと考えられる。

このように副納品を検討していくと従来、長年にわたり培われてきた厳格な如法経作法がある一方で、経塚に用いられた刀、鏡などの辟邪の用具は神仏習合のもと地域的な神祇信仰と結びついており、記録に残らない呪術的な作法があるのであろう。

今後は経塚造営地の選定から経典埋納を経て経塚の完成にいたる一連の経塚構築過程の中でさまざまな儀式が執り行われていることを前提に副納品の組合せ、配置状況、出土状況を分析することで、多様な副納品のあり方や聖や験者といった遊行的僧侶の具体的な活動がみえてくるだろう。

最後に堂ヶ谷廃寺・経塚の報告書作成から、シンポジウム、そして本稿を執筆する際には足立順司氏に多大なご教示、ご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

足立順司 2004 「東海の経塚と貿易陶磁—その地域性—」
日本貿易陶磁研究会

- 足立順司 2010 「堂ヶ谷経塚の刀と弓矢—経典埋納の作法—」『堂ヶ谷廃寺・経塚』(勸静岡県埋蔵文化財調査研究所)
- 石田茂作 1929 『経塚』考古学講座 雄山閣
- 井口喜晴 1999 「折り曲げられた鉄刀を伴出する経塚遺物」『鹿園雑集』創刊号 奈良国立博物館
- 市橋重喜ほか 1986 『上板井古墳群』兵庫県文化財調査報告書34 兵庫県教育委員会
- 稲垣晋也 1977 「経塚と遺物」『経塚遺宝』奈良国立博物館
- 井鍋誉之ほか 2010 『堂ヶ谷廃寺 堂ヶ谷経塚』(勸静岡県埋蔵文化財調査研究所)
- 猪狩忠雄ほか 1998 『上ノ原経塚』福島県いわき市教育委員会
- 亀田修一ほか 1988 『播磨江ノ上経塚』瀬戸内考古学研究所
- 兜木正亨 1984 「如法経と経塚」『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚
- 兜木正亨 1983 『法華写経の研究』兜木正亨著作集 第2巻 大東出版社
- 勸静文研 2010 『平安時代の祈りと願い 発表要旨集』
- 笹川龍一 1997 『香色山山頂遺跡群調査報告書』善通寺市文化財保護協会
- 時枝 務 2011 「第3章 善応寺経塚の研究」『苗敷山の総合研究』苗敷山総合学術調査研究会
- 鍋田 勇 1988 「私市丸山経塚の調査」京都府埋蔵文化財情報 第28号 財団法人 京都府埋蔵文化財センター
- 布尾和史ほか 1999 『10章 長滝墓山C遺跡』『能美丘陵東遺跡群』IV (勸石川県埋蔵文化財センター)
- 三宅敏之 1967 「経塚」『日本の考古学』VII 歴史時代下
- 村上正名 1957 「安芸国本郷町経塚報告」『考古学雑誌』42-4 日本考古学会
- 村上 隆 2010 「堂ヶ谷経塚のなぞに迫る」『平安時代の祈りと願い シンポジウム 発表要旨集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 村木二郎 2003 「経塚に埋納された鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』鑄鏡研究会 ミネルバ書房
- 村木二郎 2004 「経塚の拡散と浸透」『中世の系譜 東と西 北と南の世界』高志書院
- 森田 稔 1983 「滝ノ奥遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 山川公見子 1999 「経塚造営の作法とその用具」『考古学論究』第6号 立正大学考古学会